

奮起いたさなければならぬのであります。今や時代は刻々に轉換しつゝあるからであります。否、時代を轉換せしめる力として吾々自身が大いに奮起いたさなければならぬ時が來てゐるのであります」と特記されてゐるのである。以て、著者の意の存するところを察知すべく、この書の使命に想到すべきである。

尙ほ本書に於ては、倫敦のアフリカ協會、王室地理協會設立の重要性に觸れられてはあるが、各國內の政治經濟的、軍事的諸背景、乃至は對外政策と、その國人による探檢調査事業との關聯性の如きに就ては論及せられて居ないのであるが、これに就ては、著者は實用的見地よりする世界各地の探檢が、世界を植民地化せんとする謀略地政學の基礎を提供した事實にも想を致して、既に數年來京師帝國地理學教室に於て探檢に關する講議を續け來られたところであり、此の書の表面には現されなかつた右の如き觀點よりする探檢史の如きも、本書には割愛せられた東洋人殊に日本人による各地の探檢史と共に、今後に期待して然るべきものと思はれる。

附録の「伊能忠敬先生」は、我が國科學界の先覺者たる同先生の傳記と、その測圖事業の重要意義について述べられたもの、また「蒙疆事情」は蒙疆の地勢、民族、交通、産業に就て、三日間に亘つて述べられたものである。

要するに、この書は座右に備へて便利、江湖に應むるに好適の書であるが、唯出版の都合からか圖版及び地圖の添附せられてゐないのは遺憾の點である。(日本放送出版協會版、一六六頁、定

價五拾錢) (三上正利)

大陸文化研究

京城帝國大學大陸文化研究會編

支那事變を契機として大陸に關する種々の著作が相繼いで公にされた。就中、政治經濟的な述作は過去四年間に汗牛充棟も當ならざる有様となつたが、文化に關する著作は極めて寥々たるもので些か寂寞の感がないでもなかつた。事變處理、進んでは東亞新秩序の建設に政治、經濟の役割の重要なものは勿論であるが、之と相並んで文化の果す役割も多大である。政治的、經濟的工作が表面的なるに反して、文化的工作は内面的であり基礎的である。日支兩國相互の眞の理解を助け政治的、經濟的工作の動もすれば利害相反撥するを和げて兩國の協力を可能ならしめるものはこの文化工作を措いて外にはない。隨つて文化こそは東亞の新秩序建設の成否を握る最も重要な鍵の一つであるとも言ひ得る。この意味に於て大陸文化の認識を目標とした本書がこのたび世に出たことは誠に慶賀に堪えない。

京城帝國大學は曩に滿洲事變の直後、滿蒙文化研究會を組織して大陸に關する學術的調査に努めてゐたが、日支事變勃發を機としてこれを改組して大陸文化研究會と爲した。この昭和十四年度の事業として教授の滿洲、北支出張調査、學生の蒙疆地方派遣を行ひ、更に大陸文化講座を開催して一般に公開し大陸文化の認識に資した。該講座の講演を採録したものが本書である。従つて本

書の内容も自ら廣く文化一般に互り政治、經濟、歴史、地理等の文科科學より動物、植物等の自然科學部門にまで及んでゐる。その内容を左に示せば

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 尾高 朝雄 | 國家の目的と大陸經營 |
| 森谷 克己 | 東亞新秩序の建設 |
| 鳥山 喜一 | 北アジア史概論 |
| 今村 豊 | 北アジア人種概論 |
| 秋葉 隆 | 北アジアの民俗 |
| 天野 利武 | 支那民族性論 |
| 大谷 勝眞 | 西域文化史概論 |
| 佐藤 泰舜 | 支那佛教史論 |
| 鈴木 武雄 | 支那幣制論 |
| 靜田 均 | 滿洲産業の開発過程 |
| 小田 忠夫 | 滿洲國財政の特質 |
| 多田 文男 | 内蒙古に於ける農耕地帯と遊牧地帯の境界線とその移動 |
| 水島 治夫 | 日滿の人口問題——内鮮滿人の生命表と眞の人口自然増加率—— |
| 杉原 徳行 | 漢方醫學想念に就て |
| 森 爲三 | 北亞細亞の動物 |
| 石戸谷 勉 | 北亞細亞の植物資源 |
| 小林晴治郎 | 滿洲及北支の傳染病及寄生蟲病 |

附 録

澁谷 禮治 支那事變處理に關聯して
西原 貢 武人の見たる山西の資源

の如くである。尾高氏は「國家の目的と大陸經營」なる論題の下に法律、道德及び文化の大陸經營に演ずる役割を述べその齎らすところの多大なるを論じて本書の序論となしてゐる。これに次ぐ森谷克己氏の「東亞新秩序の建設」は支那事變の性質を論じ東亞新秩序は單に東亞内部の問題としては完遂し得られずして、その目的貫徹の爲には世界狀勢に透徹した政策に依らねばならぬことを強調してゐる。これら二篇は附録の澁谷禮治氏「支那事變處理に關聯して」と共に、概察的議論にして、何れも詳細なる研究とは稱し難きも、大局より事變の處理に就て論じ東亞新秩序建設に示唆するところが多い。

これに反して鳥山喜一氏「北アジア史概論」以下の七篇はいづれも概論的ではあるが、各々の専門とするところに纏着を傾けてゐる。鳥山氏は滿洲、蒙古、シベリアを含む北アジアの歴史的考察より始めて東西勢力の交渉による現勢北アジアにまで説き及んでロシアの極東政策を述べ、近時の我が國の大陸進出まで論じてゐる。又、天野氏は心理學的見地より支那の民族性の諸特徴を各種の文獻に涉獵しその頻度を求めてその基礎的性格の粘液質的なることを指摘してゐる。而してこの民族性の理會によつて大陸經營に資するところあらしめんとしてゐる。佐藤氏は支那佛教の史的考察を試み、終に「將來への展望」なる章を設けて日支兩國共通の宗教たる佛教に於て日支兩國提携への努力がなさるべきことを主

張してゐる。鈴木氏も「支那幣制論」に於て法幣の性格を論じ最後に法幣の今や全く瀕死の状態にある今日確固たる支那幣制確立の焦眉の急なるを叫んで篇を結んでゐる。

又静岡均氏「滿洲産業の開發過程」以下の諸篇は各々特殊の論題を掲げて何れも緻密なる研究を行つて居り傾聴すべき議論も甚だ多い。

以上讀するに及んで氣付くのは諸篇が各々研究の分野を異にするもこれらが一貫して事變處理、東亞新秩序の建設を目標としてゐることである。而もそれらが際物的でなく、常に的確なる論據に基いて科學的に論を進めてゐることである。又本書が多方面に互る研究を網羅してゐることは大陸に關する諸方面の知識を豊富ならしめ、自分は大陸文化への理解の度、頁を追つて深まるを覺えた。日支提携の叫ばれる、今日、かゝる書の公にされたことは何よりも先づ悦ばしい。

本書の紹介を了るに臨んで編者大陸文化研究會の今後の活動を祈る。(菊判五四六頁、岩波書店發行、定價四圓五拾錢)(柴田孝夫)

東洋地理思想史研究

鮎澤信太郎著

少くとも東洋に關する限り、地理學史はまだ曠野である。極く僅かの人達が、ところ／＼に美しい花を咲かせてはゐるが、それ等が一つ／＼の沃野になる爲には、まだ多くの努力が要求されるであらう。全體的な展望がなされる爲めには、あまりに不確か

な資料ばかりである。我々に残された個々の作品は、一々綿密な検討を経られなければならない。近年々々として地理學史に關する多數の研究を發表して居られる鮎澤文學士は、このことを最もよく認識して居られる一人である。この東洋地理思想史研究に一貫する方法が書誌學的であることは、それを物語つてゐるであらう。そしてこのことが、この書の價值を一層貴重なものたらしめてゐる。

著者の「調査」が極めて周到で且つ的確であるのも、かうした態度から齎されたところであらう。詰らない揚足取りをすれば、贅語箋の撰者を公治長なるもの、如くだといつて居られるやうな、誤讀らしいと思はれる例もないではない。だが、それは枝葉に關してである。本題として取上げられたものに關する限り、豊富な資料と精緻な考證は、その業績を充分信憑し得るものにしてゐる。だから、この書に、東洋に於る地理的思想の展開を端的に求めやうとする讀者があれば、失望を感じるだけだらう。それは鮎澤さんにとつては明日の仕事なのだ。本書の内容が比較的斷片的な研究の集成たる觀を免れないのも蓋し已を得まい。

それは三部から成立つ。第一篇上代人の地理觀察は、主として紀記に就いて語られるが、本書に於てはあまり重要な部分ではない。第二篇は、題名通り紹介すれば、「明末清初耶蘇會士が支那に紹介した世界地理書とその影響」である。こゝに集められた十四篇のうち、「利瑪竇の世界地圖に就いて」や、短文ではあるが「利瑪竇の兩儀支覽圖に就いて」の紹介などは、とりわけ有益な勞作